

獣舎の改修に伴うダチョウの園内移動

○岡崎孝樹，尾崎礼子
(横浜市立野毛山動物園)

当園では現在ダチョウ(*Struthio camelus*)のメス1羽を飼育展示している。当該個体は園内で人工繁殖を行った個体で、間接飼育を行っている。2019年8月から10月にかけてダチョウ舎の改修工事を実施したため、工事期間中は空き獣舎となっていたシマウマ舎で飼育管理を行った。今回は獣舎間の移動の際、直接飼育への馴致を行い、保定しながら自力で歩かせて移動を行った。

直接飼育への馴致は2019年6月6日から開始し、①担当者が一人で展示場に入り給餌②複数人で展示場に入り体に触れる③複数人で寝室に入り給餌④寝室内で体に触れるという順序で6月30日まで行った。

移動は7月1日に実施した。ダチョウ舎寝室で保定を行い、5名で保定を維持しながらシマウマ舎へと移動した。個体が興奮していたことから保定に手間取り、移動中も複数回抵抗したが、保定は外れずに移動は完了した。

移動後は採食量が減少したが、約3週間で通常の採食量に回復した。シマウマ舎では環境に馴れるまでは終日屋内飼育にしていた。8月13日以降は30分～1時間程度の放飼を実施した。放飼場がキリンの展示場内にあるため、キリンを放飼していない時のみダチョウを放飼した。

10月6日からはダチョウ舎に移動するための準備として直接飼育の馴致を開始した。馴致は①一人で寝室に入り給餌②複数人で寝室に入り体に触れる③複数人で放飼場に入り給餌④放飼場で体に触れるという順序で11月4日まで実施した。

ダチョウ舎への移動は11月5日に実施した。保定は放飼場で行い、シマウマ舎への移動時と同じ人員で実施した。ダチョウ舎への移動は個体が落ち着いており、途中で抵抗することがなかったためスムーズに完了した。移動後も落ち着いていたため翌11月6日から展示を再開した。

今回は当該個体が人工繁殖個体で馴致がスムーズだったこと、段階的な馴致により脱感作が行えたことが無事に獣舎移動と飼育管理を行えた要因だと考えられる。